

今も続く、被爆者のたたかい 矢野美耶古さん

私は矢野美耶古です。当時 14 歳でした。



1945 年 8 月初めから、広島市では爆撃による火災の炎症を防ぐため、市を南北に分断する大きな防火帯を東西約 5 キロに渡って作る計画で、区域内にあった民家を強制的に立ち退かせる建物疎開作業をおこないました。その作業は兵隊さんが中心となり、それを義勇隊や中学生、女学生の低学年が手伝いました。

私の通っていた広島市立第一高等学校の 1、2 年生も、8 月 5 日から現在平和公園になっているあたりで作業をおこないました。5 日の夜はいつになく警戒警報、空襲警報が繰り返され、防空壕の中で長い時間を過ごすうちに、私は激しい腹痛を起こし、6 日は作業を休んで生き残りました。

8 月 6 日午前 8 時 15 分、私は爆心地から南 4 km の自宅で、家族と一緒にいました。突然北の空がピカッと光り、家族はそれぞれ防空壕へ逃げていきましたが、私 1 人逃げ遅れてその場にいました。

地底から突き上げられるように、座っていた畳と一緒に吹き上げられ、落ちた時には床が抜けていました。夢中で外に飛び出してあたりを見ますと、大きな松の木も根本から倒れて、枝の半分は茶色に焦げておりました。家は倒れなかったんですが、めちゃくちゃに壊れていました。ふと北の空を見上げると、今でも目に焼き付いているのですが、赤、黄、オレンジ、紫色… ほんとに表現しがたい火の玉が浮いているのが見えました。その後、不気味な入道雲、これは原子雲なんですが、もくもくと湧き上がっていました。日食の時のように、あたりが暗くなってきました。爆風と衝撃波によって広島中のちりが吹き上げられ、太陽の光を遮ったからです。どれほど時間が経ったのか、裏の方から「家の下敷きになってる人がいるから、助けてくれ～」と叫ぶ声で、我に返りました。

そのうち、ケガや火傷をした人が逃げてきました。時間が経つほどに火傷のひどい人が増えてきました。皮膚は垂れ下がり、顔は真っ赤に腫れ上がり、知人から声をかけられても、誰なのか判断がつかない状態でした。昼間はケガ人を宇品の港まで運びました。夜になっても、ゲガ人の行列は途絶えることなく続きました。私の家はお宮で、臨時の救護所となり、3日めの夜は 50 人くらい泊まりました。家族は野宿をしました。

翌朝、何よりも驚いたことは、無傷だった人も亡くなっていました。お宮と隣の幼稚園に收容された人が何人も亡くなりましたから、翌日から私の主な仕事は死体を焼く火の番でした。救護所は、9 月の末まで続きました。家族の中で一番に症状が出たのはすぐ上の姉で、8 月 16 日の夜から高熱を出して寝込みました。軍医さんに診察してもらったところ、これは赤痢だから隔離しなさいと言われました。でもその頃、家族全員下痢をしていたので、食料事情が悪いのと、衛生状態が悪いからだろうと軽く考えていました、結局 1 ヶ月半寝込みました。

私は 17 歳頃から貧血がひどく、たびたび倒れるようになりました。口内炎や目にもものもらいが次つぎで、身体の弱いところに紫の斑点ができました。身体がだるくてたまらないので、病院で検査をしたところ、「白血球が減少しているが、原爆とは関係ない」とお医者さんは言いました。高校を卒業して 1 年間、家でぶらぶらしていました。何もする気力がわかないのです。俗にいう「ブラブラ病」だったと思います。

1945 年 9 月 8 日、アメリカ原子爆弾災害調査団が初めて広島に入り、惨状と被害の実情を確かめたにもかかわらず、原爆放射能の後障害はありえない。すでに広島・長崎では原爆症で死ぬべきものは死んでしまい、9 月上旬現在、原爆放射能のために苦しんでいるものは皆無であると声明を発表しました。

続いて GHQ はプレスコードを指令して、約 6 年間、原爆に関する報道を弾圧しました。日本の科学者、医師の被爆に関する研究や治療の資料は、すべて GHQ に没収され、アメリカ本国に持ち帰られました。近所のお医者さんがわからなかったのは当然です。

政府はその後も被爆者を放置しました。運動によってやっと 12 年後に、それも一瞬の近距離被爆のみ被爆者として認めました。この姿勢は今も続いています。いま全国で原爆症認定裁判がたたかわれています。自らも被爆者で物理学の沢田先生や遺伝学の市川先生が裁判の証人に立ち、キノコ雲から降下した放射性微粒子を体内に吸い込むと、内臓に付着して長い年月かけて細胞を破壊する、内部被曝の問題を証言されました。

イラク戦争で砂漠に落とされた劣化ウラン弾のチリは風に乗って世界中にばらまかれています。被爆者が辛い過去を証言するのは、若い人に自分たちの将来の問題として考えていただきたいと思っているからです。